

呉 小瑶

WU Xiaoyao

日本の美術館教育における中国美術
A Study of Chinese Art in Japanese Museum Education

芸術支援領域

序章

本研究は、日本における中国美術の受容を理解することを手掛かりにして、日本の美術館教育における中国美術に関する教育普及活動の内容を明らかにすると共に、事例の分析を通じて中国美術に適用される教育普及活動の可能性を探ることを目的としたものである。

1978年中国に「改革開放」政策が確定し施行されて以来、中国の文化交流戦略は大きく方針転換し、中国美術の「対外伝播」も新しい段階に入った。1990年代の初め、中国美術の最も重要な伝播手段は博物館・美術館での中国美術展の開催であった。この時期に、日本の博物館・美術館は展示活動のほか、教育普及活動にも積極的に取り組んでいる。ギャラリートークやワークショップなどを盛り込み、作品と観客のつながりや親近感を強調し、美術館の教育機能が強化された。現在の日本では、多くの美術館が、教育普及活動の一環として小・中学校と連携したプログラムを実施している。美術館側には来館者を増やすことができ、学校側には教室授業ではなかなか触れることができない本物の美術作品に触れることができる。このような教育普及活動の中でも中国美術に関する題材が時々登場する。しかし、日本の美術館教育における中国美術について、中国および日本では未だに十分な研究が行われていない。

本研究では、この未解明の課題に対して、まず日本の美術館教育の状況を考察し、教育普及活動を展開する社会的な背景を把握する。次に、「中国美術」に関する認識や「中国美術展」の展開、マスメディアにおける伝播などの視点から、日本における中国美術の伝播、受容と変容に関して明らかにする。また、東京国立博物館と世田谷美術館における中国美術関連の教育普及活動の事例を通じて、日本の美術館における中国美術の教育の実態を考察する。最後に、上記の研究によりもたらされた成果を総合し、日本における中国美術を扱った教育普及活動の

特色や課題を明らかにするとともに、今後の可能性について考察を行う。

第1章

本章では国際的な生涯教育への潮流を踏まえて、日本国内における博物館・美術館教育を支える教育関連法規や制度を整理し、美術館教育の歴史や教育普及活動の特色を明らかにした。

美術館は生涯学習を達成するために、学ぶ機会を作る場所である。美術館での学習は学校における授業よりも、実際の問題から探究過程を重視し、個別化された学習結果が生まれることを強調している。日本における黎明期の美術館教育は近代美術教育の普及を基本的な目標とする傾向があったが、時代の流れとともに各美術館で様々な教育普及活動が行われ、参加者の主体性、対話性、創造性が高まり、教育普及活動の形態も徐々に「人間中心」になったと捉えることができる。これらの教育普及活動は、「見ること・聞くこと」、「身体と五感」、「想像力と語り合いこと」によって、講座・講演会、ギャラリートーク、ワークショップ、体験学習、VTS、地域回想法などに分けられる。このように、美術館と観客のつながりを強化している一方で、教育機能の内容を一層向上させることが期待される。また、美術館の教育事業は独立したものはなく、他の美術館、学校、民間教育団体、地域などと協力してより良い教育を実現することができると考えられる。

第2章

本章では中国美術に関する認識、中国美術展の展開やマスメディアにおける伝播などの視点から、日本における中国美術の伝播、受容と変容に関して明らかにした。

まず、中国と日本の研究者や思想家によるこれまでの議論を取り上げ、両国間の文化交流について、その歴史的経緯や特徴を確認した。数千年来、中国美術は日本に大きな影響を与えてきた。特に絵画や書道において、日本では中国美術の

強い影響を受けた。日本の博物館・美術館では、東京国立博物館や大阪市立美術館の例に見られるように、豊富な中国の文化資源を保有している。

本章では、1980年代以降に日本において開催された主要な中国美術展を取り上げ、日本における中国美術への関心の高まりと、文化交流における美術展の役割を考察した。日本の人々は展示品鑑賞を通じて、中国美術を知って、中国文明に対する認識を深めた。また、日本の新聞における中国美術の報道に関する研究からは、日本のメディアにおける中国の文化や美術に対する積極的な態度が指摘されている。今後、中国と日本の文化交流を深めていく上で、メディアの役割はさらに重要度を増していくと考えられる。

日本は中国美術を学び、中国美術における絵画、書道、彫刻などを日本美術と日本文化の一部に変えた。それらは中国の影響を受けながらも、日本独特の環境や風土と結びつき、日本らしい新しい美術体系を形成した。

第3章

本章では日本における中国美術関連の教育普及活動の事例を通じて、日本の美術館における中国美術の教育の実態を考察した。また、日本における中国美術を扱った教育普及活動の特色や課題を明らかにするとともに、今後の可能性を探った。東京国立博物館で開催された2004～2020年の特別展における中国美術に関連する教育普及活動の展開状況を分析すると、中国関連の展示・教育普及の継続的实施と講演会・講座を中心に知識の紹介に重点を置いているという特徴が見られる。

日本の美術館教育においてもう一つ注目できる実践は、地域の美術館による学校教育との連携である。世田谷美術館は開館以来、地域全ての小学校4年生を対象にした「鑑賞教室」を開催し、世田谷区で高い評価を受けた。本研究では

世田谷美術館における三星堆に関する事例と中国の古陶磁に関する事例を通じて、メールインタビューや文献調査を行った。

世田谷美術館の鑑賞教室特別プログラムは、事前指導と来館鑑賞の二つ部分に分けられる。事前指導は美術館の実習特別インターンが担当し、各小学校に出張する。「古代のイメージ」という事前指導は、三星堆の文物造形の独特性を捉え、造形から古代の中国美術を探求する。「ぼつぼつ壺でもみてみよう」という事前指導は、焼き物に触れたり描いたりしながら、中国の陶磁器のユニークさを感じる。世田谷美術館の教育普及活動は、専門的知識や美術史の伝授に比べて、子どもたちが活動に参加する際の体験に力を入れていると考えられる。事前指導の指導案を作成する際は、鑑賞者の視点を大切にし、鑑賞者の関連作品に対する考えを重視する。来館時には、ボランティアが児童のグループを引率し、自由にディスカッションをしながら館内を案内する活動が行われ、人との触れ合いを大事にしながら、目的意識を持って作品を見るという点を重視する。活動の様子を記録した映像では、児童たちが中国美術関連の作品を制作することへの関心が高く、自分なりの理解や想像があることがうかがえる。また、美術館内では実物を見た時の不思議な感覚や楽しい気持ちを素直に伝えていた。

このような事前指導と来館鑑賞で構成される教育普及活動はまだまだ改善できる点が多いと考えられる。教育普及活動の形態を巡り、断片化された教育普及活動を連続化する・多様な芸術表現を融合した教育普及活動を企画する・日本の中国美術に対する受容を考えるなどの課題を提起した。活動の担当者において、ボランティア活動を拡大し、中国人留学生のボランティアをより積極的に活用することを提言した。活動のプラットフォームについて、美術館のホームページでなく、ソーシャル・ネットワークキング・サービスで発信し、現在のポップカ

ルチャーと結びつき、異なる美術文化の交流と融合を図ることも提起された。

前述した内容のほか、中国美術に関連する教育普及活動の特色を生かすために、中国美術展の展示品を中国の他の文化や日本の文化や他の国の文化やポップカルチャーと関連付けることができる。展示品とその地域に関わる文化のつながりが広がり、参加者に中国美術をより包括的に理解してもらう。また、日中文化の共通点を活かし、中国美術展の展示品を日本文化と関連づけ、中国美術文化をより受け入れる。

教育的観点から深く考えると、こうした文化交流の中で、日本と中国の子どもたちが自由な雰囲気や多様化する学習環境や多様なものに憧れるといった共通点がある。日本で中国美術に関連する活動を行うことは、日本の子どもたちに中国美術に触れる機会を与え、より多様な文化を知ることができるようにする。また、このような活動は、日本の子供たちが中国に対するステレオタイプを解消し、開放的な心を持つことに役立つ。

結論

日本の美術館教育の制度、歴史や事例などから見て、黎明期から現在に至るまで、美術館の教育意識は絶えず高まっており、人々との距離も縮まっていると考えられる。同時に、美術館の教育普及活動は絶えず発展し、従来の知識普及という方式から徐々に体験型とインタラクティブな活動形態へと変化していると考えられ、美術館と学校教育の違いを認識しながらも、両者の連携をより緊密にした。その過程で、中国美術が日本に広まり、受容されるにつれ、中国美術に関する題材も日本の美術館教育に登場するようになった。

筆者が世田谷美術の事例を分析した結果、世田谷美術館の中国美術に関連する教育普及活動は、時期的にはかなり早くから行われているが、参加者の体験を重視し、中国美術と他の文化を関連付ける活動であったことがわかる。そのため、

中国美術に関連する教育普及活動も、参加者の体験から、活動の形態、担当者、プラットフォーム、特色などの視点を中心に最適化することができると考えられる。特に、中国美術の特色を生かし、中国文化と日本文化を結びつけることを重視しなければならない。

今後の課題について、本研究は東京国立博物館と世田谷美術館の事例を中心に中国美術に関連する教育普及活動の内容と形態を考察し、日本の美術館教育における中国美術の普及を検討した。事例の選定において、事例の調査範囲と時間範囲を拡大し、中国美術に関連する事例をもう一度まとめることが必要で、教育普及活動の可能性をより斬新な角度から探っていきたい。第3章の第4節では中国美術の枠組みを提示し、おおよその流れと要件を示したが、これはさらに細分化することができる。各美術館のホームページに掲載されている中国美術の具体的な教育普及方式、美術館と美術館間の経験共有方式などについて、より詳しい提案が可能である。また、中国美術に関連した題材の教育普及に向けた具体的な指導案を作成し、実施することも大切なことである。今後、そうした活動を実施後に、実践例としてまとめていきたいと考えており、中国美術に関連する教育普及活動の水準をさらに高めることを目指す。